



公益財団法人 国際交通安全学会

International Association of Traffic and Safety Sciences

2025年度 研究調査報告会・学会賞贈呈式



武内 和彦

(公財)国際交通安全学会 会長
(公財)地球環境戦略研究機関 理事長

春暖の候、各位におかれましては益々ご清栄のことと、心よりお慶び申し上げます。また、日頃から当学会の活動に格段のご理解とご支援を賜り厚く御礼申し上げます。

高質な交通とその文化は、産業・社会活動の発展に寄与するとともに生活の便利さと豊かさを支え、急速に進む情報化社会においても重要な役割を果たしています。とりわけ自動車交通の発展は、AI、自動運転技術の進化や電気自動車の台頭により、急速な変革が進んでいます。

これらの技術は、交通事故の削減や効率的な移動の実現に大きな可能性をもたらす一方で、新たなリスクや倫理的課題も生じています。これに対応するためには、技術革新を単なる利便性の向上にとどめるのではなく、社会全体の安全性や持続可能性、さらには人々のウェルビーイングの向上に結びつける視点が不可欠です。持続可能な優れたモビリティ社会の実現に向けたさらなるグランドデザインの理念構築、実践的問題解決のための調査研究および提案、継続的な教育支援活動などが求められています。

国際交通安全学会は、交通とその安全・安心のために学際的かつ国際的な視点から取り組むことが重要な責務と考えております。私共国際交通安全学会は一昨年9月17日に創立50周年を迎え、学会の内外に対しIATSSビジョン2024を発信いたしました。このIATSSビジョンに基づき、今後も持続可能で安全・安心なモビリティ社会の実現に向けた調査活動を進めて参ります。今後とも、関係者各位に変わらぬご支援、ご協力を賜りますことを切にお願い申し上げます。

今年度も、当学会定例の研究調査報告会ならびに学会賞贈呈式を催すことになりましたので、皆様にご案内申し上げます。ご多用中とは存じますが、万障御繰り合わせの上ご出席を賜れば幸甚に存じます。



一ノ瀬 友博

(公財)国際交通安全学会 会員
研究調査部会 部会長
慶應義塾大学環境情報学部 学部長 教授

陽春の候、皆様におかれましては益々ご清祥のことと、心よりお慶び申し上げます。また日頃よりIATSS研究調査活動にご理解・ご支援を賜り厚く御礼申し上げます。

研究調査活動は、私ども国際交通安全学会の中核をなす重要な事業の一つです。当学会には、交通工学、都市工学、経済学、教育学、法学、行政学、心理学、情報システム、機械工学、環境・エネルギー、医学、地域・社会、文化・芸術など、多岐にわたる専門分野の会員や特別研究員が集い、それぞれの知見を活かした多彩な研究調査プロジェクトが開発されています。

これらのプロジェクトは、会員がリーダーとなり、交通とその安全にかかわる調査・研究を複数年にわたり実施し、その成果を報告書としてまとめています。研究調査のアプローチでは「学際性」、「国際性」を重視し、成果のアウトプットでは目的達成に直結する「実際性」、「先見性」を重視しています。これら4つの特徴に基点を置き、理想的な交通社会の実現を目指し様々なテーマに取り組んでいます。

今年度は17テーマの研究調査プロジェクトに取り組みました。本報告会では、この中から4テーマの研究調査プロジェクトに加え、ATRANSから1テーマの研究調査プロジェクトの成果をご報告いたします。

今回の報告会はハイブリッドでの開催となりますが、この機会に是非とも会場にお越しいただき、活発な議論をしていただければと存じます。

また、研究調査報告会に続き、交通とその安全に多大な貢献が認められた業績、優れた著作、および優秀な論文についての学会賞贈呈式も予定しております。お忙しい中とは存じますが、皆様のご参加を心からお待ちしております。

日時	2025年4月10日（金）13:00～18:00	開催形態	ハイブリッド開催（会場開催、リモート開催）
会場	経団連会館2階 経団連ホール		

2025年度 国際交通安全学会 研究調査報告会 プログラム

13:00	開会挨拶		会長 武内 和彦
13:05	報告テーマ① [2502A]	ジュニアシート使用率向上に向けた、交通安全情報発信の在り方の研究	岩 貞るみこ
13:40	報告テーマ② [2503C]	無信号横断歩道における車両の譲りを促すための実証的研究	小早川 悟
14:15	[休憩] 20分		
14:35	報告テーマ③ [2509C]	日本型ラウンドアバウトの普及加速に向けての調査研究	中村 英樹
15:10	報告テーマ④ [2514C]	都市はウォークアブルになるべきなのか？—データに基づく分野横断的議論—	村上 暁信
15:45	ATRANS Project	Escalating Punishment for Habitual Drunk Drivers:A Study on Legal Reforms and Data System Optimization	Waiphot Kulachai
16:15	研究調査部会 部会長 総括		一ノ瀬 友博

第47回 国際交通安全学会賞贈呈式タイムスケジュール

16:40	オープニング 来賓紹介		会長 武内 和彦
16:43	開会挨拶		会長 武内 和彦
16:48	選考経過報告		褒賞助成部会 部会長 小川 和久
16:55	賞の贈呈	業績部門:のとの里山の道の守人 ～道路緊急復旧・復興現場の声に学ぶ～	一般社団法人 石川県建設業協会 石川県奥能登土木総合事務所 国土交通省北陸地方整備局能登復興事務所
		業績部門:人とまちが一つになるにぎわいの空間 ～なんば駅前広場と安全安心なまちづくりの物語～	なんば安全安心にぎわいのまちづくり協議会
		著作部門:技術システムの継承と選択 国有鉄道における改軌論争と新幹線開発	菊地 宏樹
		論文部門:ライドシェアをめぐる法制度の現状と今後の課題	谷口 博文
		論文部門:Analysis of land-use and POIs contributing to traffic accidents around intersections	中尾 聡史 澤田 昂志 Andreas Keler Jan-Dirk Schmöcker
17:15	祝辞		警察庁長官 楠 芳伸 内閣府大臣官房審議官 松林 高樹
17:25	謝辞		菊地 宏樹 谷口 博文 中尾 聡史
17:34	業績紹介	業績部門:のとの里山の道の守人 ～道路緊急復旧・復興現場の声に学ぶ～	一般社団法人 石川県建設業協会 石川県奥能登土木総合事務所 国土交通省北陸地方整備局能登復興事務所
		業績部門:人とまちが一つになるにぎわいの空間 ～なんば駅前広場と安全安心なまちづくりの物語～	なんば安全安心にぎわいのまちづくり協議会
17:59	閉会挨拶		専務理事 河合 信之

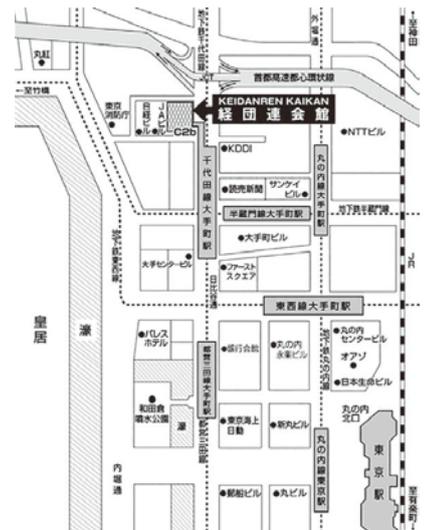
※プログラムおよび登壇者は変更になる場合があります。

参加お申し込み

<https://event.iatss.or.jp/>



[お問い合わせ先]
公益財団法人 国際交通安全学会
イベント事務局：株式会社ストラーツ
jimukyoku@strarts.co.jp



2502A プロジェクト

ジュニアシート使用率向上に向けた、交通安全情報発信の在り方の研究

《背景と目的》

近年、車内に於ける小児の死傷事故が後を絶たない。この背景には、交通安全に関する適切な情報が伝わっていないことが挙げられる。インターネットの発達により省庁や自治体、企業らが自らオウンドメディアを持ち発信できるようになったが、同時に一般人による発信やAIの登場により情報伝達の仕組みは変化し、交通安全に関する多くの情報が伝わらない状況が続いている。本プロジェクトではジュニアシートを例にとり、必要な人に必要な情報が届く実践的な仕組みを提案して子どもたちの命と生活を守り、少子高齢化の日本に於ける持続的な社会の実現を目指す。



《概要》

小学生以下の子どもを持つ保護者一万人と、子どものいない人三千人に対してインターネットアンケートを実施。これによりジュニアシートを使用しない背景には、シートベルトをしていれば安全と考える誤解が多いことを確認した。また、情報入手先として官公庁などが支持されているが、欲しい情報までたどりつけない不満が多いこともわかった。これらは情報発信者の『統一された、最新の正確な情報を、繰り返し伝える』という責務が果たされていないことで起きていると考えられ、改善が求められる。情報は正しいタイミングに届かなければ、その役割を果たさない。AI時代に対応するための情報提供の在り方を提言する。



2503C プロジェクト

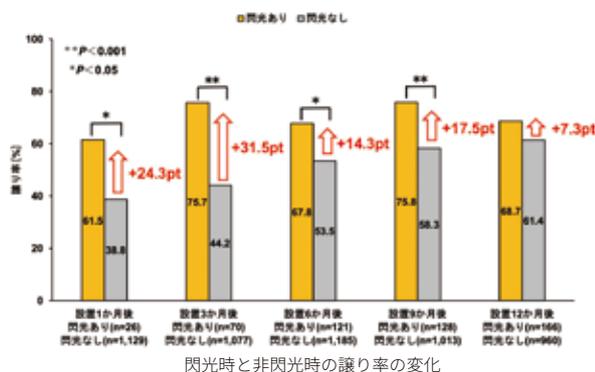
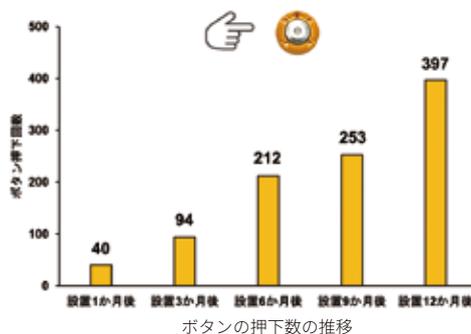
無信号横断歩道における車両の譲りを促すための実証的研究

《背景と目的》

持続的な交通管理の課題として、信号機の維持管理の問題が挙げられており、今後は信号機による制御に依らない無信号横断歩道の活用が見込まれる。一方で、無信号横断歩道での一時停止率の低さも指摘されており、その対策が求められている。海外では閃光により運転者の注意喚起を促すRectangular Rapid Flashing Beacons (RRFB)を横断歩道の施設対策として整備し、横断歩行者の通行利便性を向上させようとする取り組みがある。

本研究では、国内外における無信号横断歩道の安全性向上に向けた施設対策や考え方(制度・整備体系)を整理し、日本の無信号横断歩道における行動誘発型デバイスであるRRFBの設置効果と譲り行動の促進効果を検証することを目的とした。

結果として、閃光時と非閃光時の車両の譲り率が向上し、RRFBの設置自体が譲り行動の底上げに寄与した可能性が示唆された。また、時間経過とともに歩行者側で使用と支持が拡大し、歩行者の横断意思の可視化によって運転者の行動変容を促す効果があることがわかった。



2509C プロジェクト

日本型ラウンドアバウトの普及加速に向けての調査研究

《背景と目的》

IATSSがラウンドアバウト(RAB)に関するプロジェクトに2009年に着手して以来、継続的に調査研究を進めることで、導入検討調査～社会実験～社会実装～法改正に伴う本格展開と、各段階において着実に成果に結びついてきた。現時点では全国で170余のRABが整備されるに至っているが、先進諸国の中での普及レベルにおいては未だ緒に就いたばかりの状況である。このため、国際的視点に立ちつつ、日本にふさわしいRABの普及を加速する必要性が高い。そこで本研究プロジェクトは、全国の基礎自治体等へのアンケート・ヒアリング調査や国内実態分析、海外調査等を通じて、日本でRABの普及を阻む課題を特定し、それらを排除するために必要なRAB導入方針(日本型RAB)のコンセプトを提示する。そして、これらをセミナーなどを通じて積極的に発信していくことを目的とする。

《概要》

1. 全国基礎自治体等へのアンケート調査とヒアリングにより、RABに対する認知・理解不足と省スペース・省コスト型への高いニーズがあることを明確化した。
2. 認知・理解促進のため、双方向意見交換の場を含むRABセミナーを、事例に乏しい3県で実施したところ、少なくとも4つの社会実験・実装に結びついた。
3. 長崎県諫早市では、外径D=20mの小型RABの社会実験を実施し、その機能性を実証した。そして、同一交差点で異なる幾何構造の利用者データ収集し、今後の小型RAB設計指針の策定に際して有用な知見を得た。
4. 1.の知見に加えて、IATSSプロジェクトで開発したDB分析と海外調査に基づき、日本で必要とするRAB導入方針(日本型RAB)のコンセプトを提示した。これまでの日本のRABはコンパクトなものに限定されており、省コスト・省スペースの小型RABの一層の展開が必要であること、並びに上位階層道路向けの、円滑性重視型の大型RABの調査研究が必要であることを示した。



2514C プロジェクト

都市はウォークブルになるべきなのか？ーデータに基づく分野横断的議論ー

《背景と目的》

今日のまちなか整備で「ウォークブル」は望ましい将来像として位置づけられ、より歩きやすくするための工夫が数多く提唱されている。しかし、どのようなウォークブルになれば良いのか？それはなぜ良いと言えるのか？

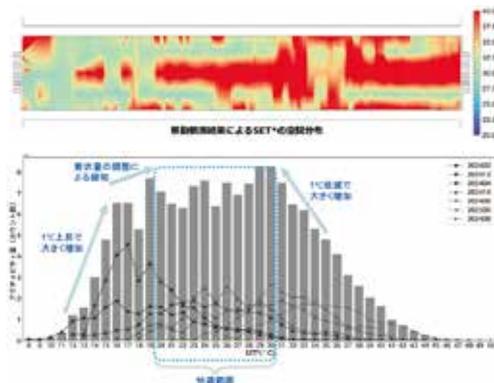
本研究はこの問題意識に立ち、客観的データをもとにして、多様なメンバーで議論することで、今後のウォークブル推進において考慮すべき点を抽出し、より良好なまちなか空間の創出手法を構築することを目指す。

《概要》 2025年度(3年目)の成果

- 人流データの解析によって熱的快適性を向上させることで歩行行動を誘発できることを定量的に明らかにした。
- リラックス効果や屋外での仕事の集中度の向上、個人の好みの場所の獲得などの直接的なpleasurabilityだけでなく、それらの効果があるという事実の共有がまちへの愛着を高めることもpleasurabilityになり得ることが示唆された。
- 国内外の事例調査から、日本では「都市計画からまちづくりへ」の象徴としてウォークブルなまちづくりが位置づけられているが、広域化には「都市計画とまちづくり」の連携こそが重要であることが示された。
- タイにおいて共同研究を開始し、タイでは安全性、舗装等の物理的な歩きやすさの比重が大きいものの、pleasurability創出の必要性も共有された。

今後の展開

研究成果を論文等として発表するとともに、タイのナショナルファンドを使った共同研究の開始が決定。また国土交通省や自治体と協働して社会実装を目指す。



**Escalating Punishment for Habitual Drunk Drivers:
A Study on Legal Reforms and Data System Optimization**

《 Background and Objectives 》

Driving while intoxicated (DWI) remains a serious global public safety issue, with repeat offenders disproportionately involved in road injuries and fatalities. Effective international strategies combine graduated penalties, rehabilitation, technological enforcement, and integrated offender tracking systems.

In Thailand, alcohol-related crashes remain high, with over 80,000 offenders placed under probation in 2022, many of them repeat violators. However, fragmented data systems across agencies hinder consistent identification and sanctioning of recidivists, weakening deterrence. This study examines legal and technological gaps in managing repeat DWI and evaluates public support for graduated penalties.

Using a mixed-methods approach, it applies SEM and Delphi techniques to develop evidence-based policy recommendations to reduce DWI recidivism.

《 Outline 》

This study examines legal reforms and data system optimization to address habitual drunk driving in Thailand. Using a mixed-methods design, it integrates a nationwide survey of 1,500 road users, analyzed using SEM, with a Delphi study involving 30 experts. Findings reveal that legal awareness, perceived risk of detection, trust in law enforcement, and perceived enforcement effectiveness significantly influence public support for graduated penalties, with perceived fairness acting as a strong moderator. Qualitative results identify fragmented databases, inconsistent enforcement, and limited inter-agency coordination as major barriers. The study proposes standardized nationwide enforcement, structured graduated sanctions with rehabilitation, and the establishment of an integrated cross-agency DWI offender database supported by modern technologies such as ignition interlocks and ALPR systems.



Panel Discussion at the Royal Thai Police



Panel Discussion at the Royal Thai Police



Survey Data Collection

国際交通安全学会賞

《業績部門》

のとの里山の道の守人 ～道路緊急復旧・復興現場の声に学ぶ～

一般社団法人 石川県建設業協会
石川県奥能登土木総合事務所
国土交通省北陸地方整備局能登復興事務所

人とまちが一つになるにぎわいの空間 ～なんば駅前広場と安全安心なまちづくりの物語～

なんば安全安心にぎわいのまちづくり協議会

《著作部門》

技術システムの継承と選択 国有鉄道における改軌論争と新幹線開発

菊地 宏樹

《論文部門》

ライドシェアをめぐる法制度の現状と今後の課題

谷口 博文

Analysis of land-use and POIs
contributing to traffic accidents around intersections

中尾 聡史
澤田 昂志
Andreas Keler
Jan-Dirk Schmöcker